

神戸大学 大学教育研究センター 大学教育研究
第 6 号 (1997年度) 1998年 3月発行 : 11-26

教養原論におけるビデオ学習の効果と問題点について (1) - 神戸大学の研究 (その 2) -

山内乾史 (神戸大学大学教育研究センター助教授)

教養原論におけるビデオ学習の効果と問題点（１）

- 神戸大学の研究（その２） -

山内乾史（神戸大学大学教育研究センター助教授）

序

本誌第４号所掲の拙稿では、学生の地域移動を扱い、神戸大学の学生の出身地・地域移動の特性について論じた。今回と次回は授業場面に目を転じてみたい。扱う題材は、主として、私が神戸大学で行っている全学共通授業科目・教養原論「発達と教育」についてである。ここで論じる主旨は、教養原論におけるビデオ学習の効果と問題点についてである。われわれ人文科学・社会科学系の大学教員の間では、ビデオ教材の使用について、まだ十分な理解が進んでいないように思われる。もちろん、教員個人の好みや科目との関連もあるだろうが、概して、メディア教材に不案内であったり、ビデオ教材を使用するのを手抜きあるいは時間つぶしであるかのように考えたりする傾向が、自然科学系の教員よりもやや強いように思われる。もちろん、私自身もそういった教員の典型であった。しかし、現代の大学生に対する教養教育・多人数教育がいかにあるべきかを考える上で、ビデオ学習の効果に関する考察は欠かせないものと思われる。学生の関心をいかにして喚起し、授業の狙いを効果的に理解させるかが、教養原論という授業科目の問題点を考える上で最も重要なテーマであるからである。

私がこういったビデオ学習の問題点について考えるようになったのは、二つの契機がある。一つは平成９年度前期に自分自身が多人数の授業を受け持たざるを得なくなったことである。後掲の表１のように、平成７年度と平成８年度とは後期のみで、指定学部は医学部保健学科（１年生）のみであったため、70人弱の受講生を対象に授業をすれば良かった。ところが、平成９年度前期に、開講の日に教室へ入るとすでに260の座席がすでに埋まり、席に着けない学生が100人ほどずらっと後ろに並んでいた。これだけ学生がいると、それぞれの学生の反応を確かめながら、授業をすることはもはや不可能である。しかも、今回は入学直後の１年生から５年生までであり、所属学部もバラバラである。しかも、397人という履修登録者（履修登録をせず授業にきていた者が数人いたので実際は400人以上）の多さを考えると、よほどの工夫が必要である。まず、これだけの学生が私語をし出すと收拾がつかない。70人程度ならば何とか押さえられても、400人ではどうにもならない。いかにして学生の関心を喚起し、引きつけ、授業に集中させるかが大きな問題になってきた。

そこで、もう一つの契機に話に移るわけだが、私は昨年度京都大学高等教育教授システム開発センターの田中毎実教授の公開実験授業に、同僚の米谷淳助教授とともに参加した。そして神戸大学大学教育研究センターでも米谷助教授の授業を実験授業としてビデオ録画し、研究会を行った。田中教授の授業の受講生数は20名程度であったのに対し、米谷助教授の授業のそれは400人以上である。当然授業方法も異なってくるのだが、最も大きな差異は、田中教授の授業が個々の学生とのコミュニケーションを中心に成立していたのに対して、米谷助教授の授業はそれを捨象せざるを得ないところにある。念のため述べておくが、米谷助教授は学生とのコミュニケーションに最も熱心な教員の一人であり、その彼をもってしても授業形態の制約上捨象せざるを得ないということである。代わりに、米谷助教授が有効に使っていたのはビデオ教材である。田中教授がプリントを中心に講話的授業を展開していたのに対して、米谷助教授はビデオ教材を中心に視覚的授業を展開していた。もちろん、田中教授

が教育哲学、米谷助教授が心理学と専攻の違いがある。したがって、一概には比較できないが、私には、いずれも受講生数の多寡にマッチした授業形態であると思われた。つまり、視覚に訴える教材を使って授業するのが最も効果的であるのは、多人数教育の場面においてではないかと考えたわけである。

私は、平成9年度の前期には400人近い受講生を抱える多人数授業を、後期には20人強の少人数授業を担当した。いずれの授業においてもビデオ教材を用いて授業をし、学期末試験にはその教材から出題し、別に感想も書かせた。その経験から教養原論におけるビデオ学習の効果と問題点について整理してみたい。

教養原論「発達と教育」の概要

まず、最初に私の担当している「発達と教育」の授業内容について述べ、そこでのビデオ授業の位置づけについて説明しておきたい。平成9年度末現在、私は「発達と教育」を4回担当したことになる。この授業を担当するまで、私には大学の教壇に立った経験はなかった。現時点においてさえも、この授業以外の教育経験といえば、京都女子大学において、平成8年度と平成9年度に少人数の外書講読（英語）を担当したにすぎない。この外書講読は平成8年度は3人、平成9年度は6人と極めて少人数であったため、ほとんど何の苦労もなかった。ともあれ、私は、奉職7年という勤務年数に比べて、極めて教育経験の乏しい教員であろう。

私の授業では第1回にシラバスを配ってオリエンテーションを行うことにしている。このシラバスは毎回少しずつ変えており、最も新しい平成9年度後期のシラバスは次の通りである。ちなみに、平成7年度後期と平成8年度後期は語りとプリントのみによって授業を進め、平成9年度前期・後期にはテキスト・プリントとあわせてビデオを利用して授業を進めた。

1997年10月17日（金）

発達と教育

第1回 イン트로ダクション

本日はイントロダクションとして、シラバスを配布し、授業の進め方、成績評価の方法などについて概要を説明し、授業は行いません。『SYLLABUS 97』のコピーを持っている人は19ページを参照してください。このシラバスには新しい情報が加えられています。

授業の種類・担当教官等についてのインフォメーション

科目区分：教養原論（人文）	担当教官：山内 乾 史（やまのうち・けんし）
主 題：人間形成と文化	（神戸大学 大学教育研究センター 助教授）
対象学部：医学部保健学科	研 究 室：大学教育研究センターD棟528号室
開講学期：後期	内線番号：6304
開講時限：金曜日・1時限	外線番号：078-803-0837
単 位 数：2単位	対 応 アー：金曜日・12:30～13:30
教 室：K棟402号室	

授業のテーマと目標

いつの時代においても、教育という営みは行われ、それゆえに教育については議論が絶えません。特に現代社会においては、一方で知識の飛躍的な増大があり、他方で生涯教育、あるいは社会人のリカレント教育などいわゆる学齢人口に関する考え方の広がりがみられます。その結果、社会において教育が果たすことを期待される役割についても、いくつかの側面については、根本的な見直しを迫られていると言えます。この授業では、社会における教育の役割、言い換えれば、社会に対して教育は何をなし得るのか、を主たるテーマとします。教育はそれ自体完結したものではなく、実に多くの人々に影響を与え、ひいては社会にその行く末に大きな影響を与えるからです。自分たちが受けてきた教育とは何であったのか、それが社会にとってどのような意味があったのかを見直すことを通じて、現代社会と教育との連関についての基本的な理解を深めてもらいたい、と思います。このような機会は高等学校までの段階でほとんどなかったでしょうから、学校教育の最終段階である大学において、自分自身が受けてきた教育についての認識を深めることはこれからの人生にとって有意義ではないか、と思います。この授業での中心的な課題は、一言で言えば、社会学的な視点で教育を捉えることです。

授業の内容と計画（予定）

上述の授業のテーマと目標を達成するべく、授業の内容と計画は次のように組み立てられます。ただし若干の変更があり得ます。年内は、過去から現在までの教育や学校が、社会学的にはどのように捉えられ、評価されているのか、これからどうなっていくのか、についてテキストを用いて論じます。年が明けてからは、特に学校と大学とかいう機関がなぜ必要なのか、そこにどんな問題があるのかを詳説します。みなさんは教育学、教育社会学の専門家になるわけではありませんから、できるだけ平易に論じます。なお1回か2回休講になる可能性があります。

第1回(10/17)イントロダクション：授業の概要

第2回(10/24)学歴社会とは何か？：学歴社会論総論その1

第3回(10/31)学歴社会とは何か？：学歴社会論総論その2

11月7日は休講

第4回(11/14)発達とは何か？：発達、教育、社会化の関連について

第5回(11/21)学校とは何か？：学校の社会的機能について

第6回(11/28)大学でいかにしてエリートが形成されるか？：その1 近代日本について

第7回(12/5)大学でいかにしてエリートが形成されるか？：その2 現代日本について

第8回(12/12)日本社会は教育に関して平等か？：高学歴化と教育機会の均等化

第9回(12/19)現代日本の大学で改革がなぜ必要なのか？：日本の大学の改革について

第10回(1/9)学閥の事例を検討する：大映映画『白い巨塔』鑑賞 - 前編 -

第11回(1/23)学閥の事例を検討する：大映映画『白い巨塔』鑑賞 - 後編 -

第12回(1/30)現代日本の学閥について：『白い巨塔』の事例から

第13回(2/6)試験

履修上の注意

宮崎和夫・米川英樹編『社会と教育への視点』（創森出版、1996年）と毎回配布するプリントをベースにして授業を行います。特に予習は必要としません。ただし、授業中に重要であると指摘した箇所は、そのまま学期末の試験問題として出題する予定ですので、理解できるまで自習してください。質問は歓迎します。限られた授業時間内で、教育に関する様々な事項を網羅的に取り上げるとか、あるいは、すべてのキーワードを詳細に説明することはとても無理なので、可能な限り自習することを希望します。

成績評価方法

成績評価は次の2点に基づき総合的にを行います。1.学期末の試験（60分間の筆記試験）。2.出席状況（減点法）。特別な事情がないのに、試験を受けなかった者、欠席過多の者には単位は出しません。評価のウエイトは試験75%、出席状況25%です。

合計して60点（100点満点）以上が合格です。80点以上がA、79点以下70点以上がB、69点以下60点以上がC、59点以下はD（不合格）です。

ただし、試験は授業内容に関連したものであり、基本的なポイントを把握していれば十分に答え得るものを課します。また分量的にも短いもの（短答式）を課す予定です。授業・試験の全日程終了後の陳情等はいっさい受け付けません。ただし、自分の得点に関する問い合わせ等には応じます。

教科書・参考書

教科書 宮崎和夫・米川英樹編『社会と教育への視点』（創森出版、1996年）

教育社会学のテキストには初歩的なものが少ないので、よほど興味がある人だけ読んでみてください。社会学、教育社会学の基本的な考え方を、ややソフトな本で学びたいと思う方には、『~~別冊~~ 知りたいあなたのための社会学・入門 - 常識破壊ゲームとしての社会学・全20講座 -』（宝島社、1993年、1010円）あるいは『AERA MOOK13 教育学がわかる』（朝日新聞社、1996年、1100円）をおすすめします。

学生へのメッセージ

授業内容に関する質問は、授業時間中、あるいはオフィス・アワー（要するに、質問の時間）に随時受け付けます。その他一般的な質問に関しても、オフィス・アワーであれば受け付けます。なお、出席する以上はできるだけ遅刻しないようにしてください。

なお、内職したり居眠りするのは勝手ですが、私語は厳禁です。やかましい人には以後の受講を拒否することにしていきます（もちろん単位は出さない）。携帯電話やポケット・ベル等を持って教室に入る場合はスイッチを切っておくようお願いいたします。出席は、次回からとります。

私の授業では、シラバスを御覧いただければわかるとおり、最初に学歴社会論について概論を述べている。ついで、各論に入り、まず発達と教育の関係について述べ、学校論、大学論、教育機会論と話を展開し、最後に学歴社会論、大学論のまとめとしてビデオを使用するという組立になっている。「発達と教育」というテーマから見れば、やや狭い範囲を扱っているきらいもあろう。だが、半期15回程度であれば一本の筋を通して授業をする方が、一つの問題を国際比較、歴史的比較などによって多角的に論じることができ、学生の関心を喚起するには有効ではないかと思った。また、授業ではできるだけ具体的で身近な例を挙げることに心を砕いた。この方法について、自由記述の中に書かれた学生の意見を拾ってみると、後述の通り、概ねこれでいいという者が多かった。

さて、前述のように私は4回授業を担当したが、そのうち、3回は医学部保健学科を対象とする授業であり、残りの1回のみ理学部・農学部・医学部（医学科）・医学部（保健学科）を対象とする授業になっていた。受講生数と成績の内訳は表1の通りである。平成9年度前期の場合、多人数授業ということもあり、全く授業に出てこなかったにもかかわらず、試験だけ受けにきた者が結構いた。その結果、評価も合格率も低くなっている。なお、試験を受ける時点までに欠席過多とか、レポート不提出とかで合格の可能性を失っていた者（試験を受けたか受けなかったかにかかわらず）、あるいは試験を受けなかった者は、すべて「放棄」したものとみなした。平成9年度後期には、前期とは逆に評価、合格率が上昇している。しかし、医学部保健学科の学生だけを見れば、私の評価基準が大きく変わったのではないことは納得していただければよい。医学部保健学科は1年生で、しかも女子が多い。そのため、出席率も成績も概ね良好である。それに対し、他学部は2年生・3年生が中心で、しかも男子が多い。これらの学生の中には、内容に関心があるから授業を取ったのではなく、要領よく単位をそろえるため取ったという者も多かったようで、出席率も成績も低くなる傾向は否めない。

表1 過去の成績分布

	医学部保健学科				全 体			
	95年 後期	96年 後期	97年 前期	97年 後期	95年 後期	96年 後期	97年 前期	97年 後期
A %	23 37.1	10 16.7	42 39.7	14 73.7	23 36.5	10 15.9	111 33.4	15 68.2
B %	26 41.9	32 53.3	31 29.2	4 21.1	26 41.3	32 50.8	74 22.3	5 22.7
C %	11 17.7	13 21.7	25 23.6	0 0.0	12 19.0	15 23.8	64 19.3	1 4.5
D %	2 3.2	5 8.3	8 7.5	1 5.3	2 3.2	6 9.5	83 25.0	1 4.5
小計 %	62 100	60 100	106 100	19 100	63 100	63 100	332 100	22 100
放棄	5	1	4	7	6	2	65	7
合計	67	61	110	26	69	65	397	29

平成9年度前期・後期の授業では『白い巨塔』と題する映画を教材として使用した。平成9年度後期の授業ではそれ以外にも、1960年代後半の学生運動のドキュメンタリーや、昔の大学祭のニュース映像などを使って、学生に感想を求めた。しかしあくまでもビデオ教材の中心は『白い巨塔』である。

『白い巨塔』のあらすじ

ここで本筋とやや離れるが、後の話の展開上、授業で用いた教材である『白い巨塔』のあらすじについて述べておきたい。山崎豊子によって書かれた『白い巨塔』の原作は『サンデー毎日』に昭和40年前後に連載され、大きな反響をよんだ。

舞台は大阪中之島にある、国立（旧帝国大学）浪速大学医学部付属病院である。そこの第一外科教授である東は停年を翌年に控え、後任の人事に着手しようとしていた。彼の第一外科には財前五郎という敏腕の助教授がおり、彼は食道外科の第一人者といわれている。だが、五郎はその傲慢不遜の人柄のため、敵も非常に多く、東自身も常々苦々しく思っていた。

東は東都大学出身であり、東都大学出身の後輩を教授に迎えようとする。そこで東は、東都大学教授の船尾に推薦を依頼する。船尾は二人の門下生を推薦するが、東は独身の娘である佐枝子の婿にとも考え、金沢大学の菊川を後任に据えようとする。菊川は妻と死別したばかりで子供がいなかった。菊川を佐枝子と結婚させることによって、東は自分の医局に対する影響力を残そうとしたのであった。第二外科の今津教授はおとなしく自分の言いなりになりそうな菊川を押すことを決め、東と手を組み、自ら参謀役を務める。

一方、五郎は義父で産婦人科医の財前又一に教授選の相談を持ちかけた。又一は大阪府医師会の副会長であり、その関係で医師会の重鎮や大阪市の医系議員に働きかける。又一は産婦人科医として成功しており、裕福であった。その財力を生かして「実弾」をばらまくのであった。医学部長で第一内科教授の鵜飼は、浪速大学出身者で学内を固め、ゆくゆくは学長選に立候補しようとしており、その足固めの意味もあって、財前を支援することになる。産婦人科の葉山は鵜飼の命を受け参謀役を務める。

さて、第一内科の鵜飼の下には里見という助教授がいた。財前と里見はともに浪速大学の出身で同期である。里見は佐々木庸平という商店主の患者を受け持っていたが、診断の疑問が晴れないため、財前に再検査を要請する。財前がレントゲン撮影により、初期噴門癌を発見した。佐々木庸平は財前により手術される。

先に述べた教授選の候補を三人に絞り込む作業において、菊川・財前の他に葛西という徳島大学の教授が選に残った。葛西は整形外科の野坂教授が押した候補で、財前の前の第一外科助教授である。野坂は学内民主化を唱え、鵜飼にも東にも反発していた。この三候補を対象にして選挙が行われた結果、三人とも過半数に達し得ず、その結果、最下位の葛西をはずして財前と菊川の二名を対象にして再度選挙することとなった。財前は一位ではあったが、予想外の苦戦を強いられたため、大いに焦る。東にしても財前にしても葛西を支持した野坂たちの票をどう取り込むかが鍵であった。東たちは船尾の力を背景に学会理事などのポストを餌にして野坂票の取り込みを図り、一方、財前たちはより一層露骨な「実弾」攻撃に出る。財前たちはそれに飽きたらず、医局長の佃たちをけしかけ、菊川に候補辞退を直談判するように、佃たちを金沢へ向かわせるという非常手段に訴える。ところが、これは失敗に終わり、船尾の逆鱗に触れてしまう。両派の票の取り込みを巡る激戦は一層激しさを増す。

この教授選のさなか佐々木庸平は容態が悪化し、里見は財前に断層写真の撮影を強く進めるが、財前は助手の柳原におざなりの指示をするだけで、自らは選挙で頭が一杯なのであった。佐々木庸平は結局死んでしまう。

結局教授選は二票差で財前が勝利し、東は停年を待たずして退官する。ところが、有頂天の財前に冷や水を賭けるような出来事が起きてしまう。佐々木庸平の遺族が財前を訴えるのである。ところが、財前はあらゆる手を尽くしてこの裁判に勝訴し、一方この裁判で良心的な証言をした里見は浪速大学を追われ左遷されるのである。

『白い巨塔』は続編へと続き、話は財前の死を持って終わるのだが、昭和40年に製作された映画では以上の部分だけで終わっている。原作のいくつかの場面が映画ではカットされており、例えば財前が西ドイツへ行き、手術を実演する下りなどは映画には出てこない。しかし、原作のエッセンスを上手に2時間半にまとめて伝えており、原作同様に映画も大きな社会的影響力を持ったのである。

さて、この続編を含まない本編のみの『白い巨塔』を平成9年度前期・後期の全学共通授業科目・教養原論「発達と教育」で学生に視聴させた。前期の受講生においては医学部・医学科および保健学科の学生が約半数を占め、後期の受講生においては保健学科の学生が大半であったため、予想以上に熱心に視聴したようである。映画として、つまり「芸術作品」として『白い巨塔』はもちろん、見るべき点の多い作品である。だが、大学問題、特にその封建的体質や閉鎖性・硬直性、人間関係の複雑さを描いた、大学問題の「教材」としても、一級品である。田宮二郎、東野英治郎、田村高広、小川真由美、藤村志保等豪華キャストの演技力も抜群で、学生も熱心に視聴していた。興味を持った学生はビデオを購入したり、原作に当たったり、医学部のドキュメントものを自発的に購入し学習した様子である。

ビデオ撮影から見えるもの

平成9年度前期において、私は自らの授業を実験授業とし、米谷助教授にビデオ撮影してもらった。授業終了後には、ビデオを見ながら感想、改善点、問題点などについて率直な意見交換を行った。その結果、自らの授業中における姿勢の問題点が次々と明らかになってきた。例えば、自分では正面をできるだけ見て授業を進めているつもりであったのが、伏し目がちであったり、黒板の方を向きがちであったりする。あるいは黒板の使い方のまずさ、板書の字の不揃い、などなど多くの思わぬ発見に気がついた。

また、学生についても多くの発見があった。平成8年度後期には逆に私の方が米谷助教授の授業をビデオ撮影し分析しており、最後尾の学生が黒板に背中を向けてビールを飲みながらスポーツ新聞を読む姿や、あるいは、ひそひそと携帯電話で話す様子などが映っているのを見てショックを受けた。500人近い学生群の最後尾にはなかなか目が行き届かない。そこで米谷助教授にお願いして最後尾の学生の様子を観察してもらったところ、数人の学生が漫画を読んでいたのが判明した。授業のあった水曜日は『少年マガジン』の発売日であり、後列の学生は私の目が行き届かないのをいいことに「読書」していたわけだ。そこで次の授業の時に「最後尾で週刊誌を読んでいる者は試験を受けるとき覚悟しておくように」と一言言ったところ、そういった行為はほとんどなくなったし、授業終了後に数人の学生が「すみませんでした」と言いに来た。

このようにビデオ撮影は、本人が気づかない自身の多くの癖、死角にいる学生の受講態度などを写しだし、多くの示唆を与えてくれる。特に多人数教育の場合には、教員本人の意識も散漫になりがちで、無自覚な行動が出がちであるし、個々の学生の行動についても目が行き届かないという問題が出てくる。そういった欠点を矯正する手段として私にはビデオ撮影が大いに役立った。個々の学生の目のある程度意識している少人数教育の場面よりも、群を相手に授業している多人数教育の場面でこそ、ビデオ撮影は授業改善の手段として有効と思われる。

そうして、実験授業を重ねた後に、ビデオ教材を使用した授業に入った。当初の予想以上に学生は熱心に視聴していた。もちろん、ほとんど私語もなかった。当初、私は『白い巨塔』の内容が（特に1年生には）難しすぎはしないか、この教材を使用する意図を十分に汲み取ってくれるか、など多くの心配をしていたが、全くの杞憂だった。授業終了後に、『大学ランキング』（朝日新聞社）の医学部教員のインブリーディング率（純血率、つまりOBの比率）の表を提示し、あわせて表2～表4に掲げるような、神戸大学のインブリーディング率についての私自身の調査結果を提示し、学生の意見を求めた。ただし、問題が生々しいので誤解を生まぬよう、やや古い平成6年のデータ（つまり医学部保健学科創設前）を提示した。

紙幅の都合のため、本稿では後期の学生の反応のみを探り、次号、第7号において、「教養原論におけるビデオ学習の効果と問題点(2) - 神戸大学の研究(その3) - 」と題して、前期の学生の反応を分析した結果を示していきたい。

表2 神戸大学教官の最終学歴別分布(ただし、講師以上)

	昭和 50年	平成 6年
神戸大学	153 24.8	272 33.8
東京大学	83 13.5	106 13.2
京都大学	154 25.0	153 19.0
大阪大学	63 10.2	76 9.4
他旧帝国大学	51 8.3	44 5.5
筑波大・一橋大 東工大・広島大	41 6.7	44 5.5
他国立大学	19 3.1	26 3.2
大阪市立大学	11 1.8	14 1.7
他公立大学	5 0.8	12 1.5
私立大学	15 2.4	29 3.6
海外の大学	5 0.8	25 3.1
その他	13 2.1	4 0.5
合計	616 100.0	805 100.0

*……台北帝国大学を含む

表3 神戸大学教官の最終学歴別分布（昭和50年6月、ただし、講師以上）

	文学部 教育学部	法学部 経済学部 経営学部	理学部 工学部 農学部	医学部	教養部	研究所 センター	合計
神戸大学	4.9	56.0	13.2	51.1	12.3	55.6	24.8(153)
東京大学	28.2	15.4	10.3	3.3	13.8	—	13.5(83)
京都大学	22.3	11.0	35.1	22.8	25.4	22.2	25.0(154)
大阪大学	7.8	2.2	15.5	3.3	15.9	5.6	10.2(63)
大阪市立大学	1.9	2.2	0.6	1.1	3.6	—	1.8(11)
その他	35.0	13.2	25.3	18.5	29.0	16.7	24.7(152)
N	103	91	174	92	138	18	100.0(616)

表4 神戸大学教官の最終学歴別分布（平成6年6月、ただし、講師以上）

	文学部 国際文化学部 発達科学部	法学部 経済学部 経営学部	理学部 工学部 農学部	医学部	研究所 センター 大学院	合計
神戸大学	13.2	55.6	24.6	77.4	32.3	33.8(272)
東京大学	18.1	20.5	10.8	3.5	8.1	13.2(106)
京都大学	20.6	11.1	27.6	6.1	14.5	19.0(153)
大阪大学	9.9	0.9	15.3	2.6	11.3	9.4(76)
大阪市立大学	2.9	2.6	1.1	—	1.6	1.7(14)
その他	35.4	9.4	20.5	10.4	32.3	22.9(184)
N	243	117	268	115	62	100.0(805)

平成9年度後期の学生の反応

平成9年度後期の受講生数は、前期とはうってかわって、29名と極端に少なかった。用意された部屋は120人程度収容可能な教室であったため、いつもほとんどの学生が出席していたにもかかわらず、閑散としていた。授業時数が少なかったため（前掲シラバス参照のこと）、授業時間中に感想を書かせることは不可能であった。そこで、試験の際に答案とあわせて感想を書かせた。答案用紙を読んで判断する限りでは、時間的な余裕は十分あったようである。29名中試験を受けた者は22名であった。その22名全員の感想を以下に列記する。

なお、私の試験問題は全4問であり、持ち込み不可で60分であった。試験問題は以下の通り。

1. 現代日本における学歴社会の起源と成立過程について簡略に説明してください。
 2. 学校と社会・社会化と発達の三者はいかなる関係にあるのか説明してください。
 3. 学校教育制度の三つの発展段階を図示し、その基本理念の変化について説明してください。
 4. 授業時間中に鑑賞した『白い巨塔』における教授選のメカニズムについて説明してください。
- *最後に時間が余った方は講義の感想など書いてください（この部分は採点されません）。

受講登録者29名中、26名が保健学科、3名が工学部の2・3年生であった。工学部の学生から見ていく。ここでは4.『白い巨塔』に関する問題の解答（以下、4.と略記）と、*最後の感想（以下、*と略記）を取り上げる。また、明白な誤字、送り仮名の誤り、句読点の脱落が見られる場合、修正してあることをお断りしておく。

（事例1：工学部3年男子）

4. 本来、医学部のような特殊な技能が要求される学問領域では、個人の技能・能力さらには人格といった「人的資本」を重視するべきなのに、同じ大学出身者による純血度の維持に固執した「学閥」が健全な教授専攻を阻害するという学歴社会の負の部分が示された。また学会のような別の上下関係も複雑に影響した。

*学歴社会の中にくみこまれた1人として、いろいろと考えさせられた。大学に行く学生がふえることで相対的な価値は下がり、神戸大学という比較的上位の学校に来ていながら、「その地域の学校は他地域での評価より高い」というくらいの恩恵にしか与かれそうになく、少しがっかりした。とはいえ、そんなに能力があるわけでもなく、学歴はないよりある方がいいよなという保険的感覚は全くそのとおりだと思し、それじゃあ学歴社会はやっばりなくならないと思った。

（事例2：工学部3年男子）

4. まず、次期教授候補を選び選考委員によって数人にしぼられる。残った数人を投票によって決めるわけだが、この票を持っているのがその大学の基礎、臨床双方の教授達である。この1票は非常に大きなもので、それを得るために候補者やその推薦者は投票前に根回しをする。それは金であったり、接待であったりする。

*わかりやすい授業で、授業内容も自分のこれまでの学校生活についてのことだったので興味のあるものでした。

（事例3：工学部2年男子）

4. 教授選は教授会といわれる、助教授らが参加できない閉じた場所で行われる。選ばれる人材は、もちろん、実力も必要であるが、自分たちの意の中の者、扱いやすい者が選ばれる。その陰では、いろいろも使われ、公平なものではない。また、もし教授などに反発でもしようものなら、教授になるどころか、今の地位もなくしかねないため、指示される一方である。

*今までに、教養原論の講義は、5～6コマはとりましたが、ほとんどが人数がすごく多く、いつでも教室が

ガヤガヤしていて、おもしろくありませんでした。でも、この授業は人数がとても少なく、授業の内容もおもしろく、今までで一番よかった教養原論でした。今のシステムでは、1クラス200人以上とかもあるので、どうにかした方が、生徒のためにもなるし、教授方も気持ちよく授業できるのではないかと思います。

(事例4：医学部保健学科1年女子)

4. 個人の能力、業績また、その人がどれだけ優秀な人材であるかということよりも、その人の出身、門閥などの方に重点をおいて教授選が行われていた。コネや出身校なども関係が深かった。

* この「発達と教育」の講義は、後期の教養原論の中で、最も興味のある講義でした。そして、比較的わかりやすかったこともあり、いろいろなことを考えさせられたりもしました。最後に、「白い巨塔」の結末が納得いかなかったです。先生が、まだ続きがあるとおっしゃって、そうかと思った。本にもあると聞いたのでまた見てみたいと思います。

(事例5：医学部保健学科1年男子)

4. 医学には臨床と基礎というものがあり、それぞれに教授や助教授などがいます。教授を選ぶ際には、臨床と基礎の教授が集まり、教授会というものが開かれ、その中で投票が行われ、その結果、教授が決定されます。三人の立候補者で行われた場合で、票にあまり差がないような場合は、その中の上位二人が選ばれて、1週間後に行われた教授会によって再び投票が行われ、教授が選ばれました。票の中には、いわゆる「ワイロ」(お金)などによって動かされたりしているものもあり、財産や権力を持っている人々に有利になっている傾向があるようにえがかれていました。

* <記載なし>

(事例6：医学部保健学科1年女子)

4. 病院内は大きく、臨床医学と基礎医学に分かれる。そして、その臨床医の中でまた細かく第1, 2外科や内科などに分かれている。教授選の候補者選びの要素としては、まずは人柄・医学的能力において優れているか。そして、もう一つは、出身大学も、映画の中では、浪速大学出身か外部大学出身者(東都大)であるかも要因となった。だいたい臨床と基礎はあまり仲が良くない。そして、第2外科の教授は、第1外科を、教授が弱ければ自分の手中におさめようとねらっているなど、その教授1人1人の、自分の利益・地位などが、一番大切なようであった。そして、やはり、お金による根まわしが、きっちり行われ、助教授陣もこれからの身の安全等を判断した上で、できるだけ自分に有利になるように働いていた。そして、その各々の医局の教授陣の投票により、過半数を得た人が教授となった。

* 少ない人数なのに、ありがとうございました。最後の授業のビデオを見て、昔の自分たちくらいの人の考えている事が、今の自分たちと比較してずいぶん違うと感じました。おもしろかったです。

(事例7：医学部保健学科1年女子)

4. 全体として藩閥・門閥・閥閥といった前近代的な社会と学歴社会が、からまり合いにながら、進んでいく。浪速大学の教授には浪速大学の出身者になるべきであるという考えは、学名のブランドに頼っていたり、学歴によってその人の基本的な能力や潜在能力を推論していたり、統計的に浪速大学の教授には浪速大学出身者がよりよい功績を残しているといったような見方から導かれている。また財前が技術で優れているということはより高い学歴にはより高度な知識や技術が伴うということを示している。その他に医学部特有の臨床と基礎の対立がからんでいる。

* 金曜日は言語の授業が後に2つもあるため、熱心に予習・復習ができなくて残念でした。結局完全な仕組みなどないのであって、例えば学歴社会にしる、このように多くの人がその利点や欠点について議論したりする動的な活動が続くことが、より良い方向に向かう方法のように思いました。

(事例8：医学部保健学科1年女子)

4. 浪速大学の教授選についだが、まず候補者を書類審査し、何人かに減らす。この時、学歴等を参考に、また、同じ地方からの候補者が重ならないようにした。最終的に浪速大学出身の財前助教授と他大学の1人が残り、この2人の決選投票となった。投票権のある人々は、どちらに能力があるかというよりも、どちらが教授になれば自分が有利になるかという点から票を投ずるものが多かった。味方を増やす為に、お金を用いたり、権力を利用したり、はっきり言ってきたないことばかりが行われた。候補者である財前は教授選のことで頭がいっぱいになり、本職である医師の仕事をおろそかにし、誤診をしてしまい、訴えられた。結局、財前が教授になったのだが、彼の豪遊ぶりで、彼自身命を失ってしまうらしい。

* <記載なし>

(事例9：医学部保健学科1年女子)

4. まず教授候補を選ぶ。その1人1人には応援してくれるグループがあり、教授選での採決の票を獲得するために医師会や審査員などに多額のお金を持っていき、票の約束をする。つまりいかに多額のお金を動かすことができるか、そしていかに強い肩書きを持った人を味方につけるかが教授選において勝利を得るための要素である。

* 今日、英語と中国語のテストもあって、昨日テスト勉強ヒサンでした。

(事例10：医学部保健学科1年女子)

4. 財前助教授と菊川教授の争いの中で、財前助教授のバックには義父や財前助教授を支持する医師たちが、ワイロをおくって票を獲得し、菊川助教授のバックには、東教授、船尾教授といった有能な教授がいる。財前は技術的にはすごいが、人格はというと、あまりいい風には思えない。患者をくわしく検査しないで、自分の責任で死亡させてしまったにもかかわらず、里見助教授にふっかけていくところなど、人格が疑われる。にもかかわらず、なんとかして票をかきあつめたおかげで教授選には勝ち、そこには、財前教授が主人となった大きな派閥のようなものができてしまう。財前に異論を唱えた里見助教授はとばされてしまう。教授選はその人の技術・人格・などはさほど重視せず、ただの派閥争いにすぎない。自分のうしろだてによって勝負が決まってしまう。

* 後期の授業、ありがとうございました。『白い巨塔』は少しショックでした。これから自分たちがかわっていく世界なので、医者には純粋に患者を治すという立場でいて、地位とか名誉とかを追わないでほしいなと思っていたので。でもおもしろかったです。私達は一応、高学歴ということになるけど、今の時代、「偏差値教育」、「学歴社会」とか言って非難されていますが、ここまできた以上、なくなることはないと思います。けれども偏差値によってその人間が比べられたり、たった1回の大学受験で一生大学の名前がついてまわってくる様な社会にはストレスがたまり、うんざりします。いい大学をでた人ほど、大学の名前で人を判断するようになるところがあると思います。かわることはないのかな?!

(事例11：医学部保健学科1年女子)

4. 同じ病院の同じ科でも医師の間には派閥があり、教授選はいわばどちらの派閥が今後、その科で権力を握るかの争いである。選挙に勝つためには、お金を使ったり、手段を選ばずいろいろな裏工作をする。もし選挙に敗れば、立候補した医師はその病院から出ていかねばならない状況になり、その医師を支持した者も、今後の出世も期待できず、弱い立場をとらざるをえなくなる。要するに、教授選の勝敗でこれからの陣税が変わってしまうと言っても過言ではないと思われる。

* 今まで「発達と教育」の講義をうけてきて、日本がいかに教育大国であるのか思い知りました。講義中に鑑賞した「白い巨塔」では病院内の汚れたところを見ることができましたが、これから看護婦として働く場での現状もあのような感じなのかと恐ろしく思いました。「学歴」ばかりが全てではないと世間でもよく言いますが、まだやはり重視されているのが現実なのだ実感しました。半年間どうもありがとうございました。いろんな事が分かって、充実した時間でした。先生、よろしくお願ひします。

(事例12：医学部保健学科1年男子)

4. 正当に適任者を選ぶものではなく、私利私欲をむき出しにしたものである。中には正当に選ぶものもいるが、多くは最初から候補者の派閥に属するもの、中立的立場、もしくは敵対関係を把握した上で、どうすればその派閥の鍵となる人物を引き入れられるか、どれだけの派閥を引き入れられるかが焦点として争われる。そこにはルールは何もない。結局の所、いかに人脈を広げられるかという汚い、みにくい争いで教授選は行われる。

* <記載なし>

(事例13：医学部保健学科1年男子)

4. 第一外科の教授選、立候補者が3人いる。そのうちで第一外科の助教授と、他の大学の教授で第一外科助教授と東都大学教授が推薦している人の2人が残り、争う。臨床内では、外科(第一、第二)、内科などそれぞれの利益のために動き、一方では基礎の票をにぎっている人は、自分の利益を考えず平等にという人で、その票が結果につながるとして、両者を支持している人がいろいろと動きまわる。臨床と基礎、臨床の内部、さらには第一外科内の教授と助教授の間で、それぞれの教授が持つ一票を争う教授選であった。

* 『白い巨塔』はおもしろかった。続編が気になっていますが、あらすじを聞いてしまっているので、レンタルまでもしてみるのとは、と思っています。

(事例14：医学部保健学科1年男子)

4. 教授になるためには、いかにして教授選で票をかせぐか、ということだけである。票の獲得のためには、お金を渡したり、酒を飲ませたりする手もある。また全国で、ものすごく有名な教授(『白い巨塔』の中では船尾教授)から推薦を受けた人は、それだけで票を獲得しやすくなる。一方、投票をする人たちも、どの人が教授になるかで、自分の将来も変わってきたりするので、甘い汁の吸えそうな人の後ろについていく。あるいは他の科の教授もいかに扱いやすい人が教授になるかということも考えている。(『白い巨塔』の中では、第二外科の教授が第一外科をのっ取ろうとしていた)また学閥が存在するので、大学間の差別が大きい。

* 『白い巨塔』を見ることで、昔の学閥のドロドロしたものを知ることができて良かったと思う。続編を見てもみたくなった。

(事例15：医学部保健学科1年男子)

4. 浪速大学医学部の教授陣は純潔性が高かった。よって一人の教授が退官するときに新しい教授を選出するのも、十七名ほどの基礎とほぼ同数の臨床の浪速大卒の教授達であり、浪速大出身者が有利といえる。選出に当たって、まず候補者を数名(3名ほど)教授の推薦により募り、それから三十余名一人一票の選挙をし、過半数を超えたものが就任できる。過半数を超えない場合、決選投票になる。実際には学部内にいくつかの派閥があり、その後の利害なども考えられ、票読みと買収が横行している。したがって巧妙で熾烈な裏工作戦になり、資金量、コネ等の有利な方が勝ってしまう。

* 大学で大学のあり方、欠点等を学ぶのはパラドックス的でおもしろかった。それより『白い巨塔』のドロドロさの方が印象には残っているが。

(事例16：医学部保健学科1年男子)

4. ただ大学にとって本当にふさわしい、それだけの知識・能力・人間性のあるものを選ぶのではなく、同大学の出身であるなどの学閥という前近代的な考え方、また教授決定後に自分がどれだけ大学において権力をもつことができるかなどの要素がからんでくる。

* 『白い巨塔』は3回にわたって鑑賞し、また間に1回休講もはさんでいるので、話が途切れ、じっくり鑑賞することができなかった。仕方のないことではあるが、もう少しじっくり見たかった。

(事例17：医学部保健学科1年男子)

4. 現教授が次の教授を推薦し、教授会で審議し、他の候補との投票で決まるのが一連の流れである。その教

授選で表れたのが、学派、学問分野の違いによる組織内の対立である。医学部では、臨床と基礎が対立していて、外科・内科・産婦人科などの主要な科と、その他の科との対立も見られる。そして臨床の教授選では、基礎系の教授の票がどれだけ取れるかがポイントになる。また、学内の民主化を大義名分に地位向上をもくろむ、その他の科の教授をとり込むのも大事となる。さらに現教授の退官後も影響力を残したいというねらいも重なり、権力やコネ、金まみれの票集め競争が行われる。このようにして、結局は、金の力で票を集めた現助教授が教授に選ばれることになった。

* 社会の不平等には気づいても、その不平等を前提として、学校教育が行われていることに気づかされ、開眼した部分がある。おもしろかった。

(事例18：医学部保健学科1年女子)

4. 3人の候補があり、それぞれに浪速大医学部内の派閥の後押しがあった。そしてその派閥の持っている権力を使って、票の獲得競争を行っていた。財前陣営なら医学部内の実権、菊川陣営なら船尾教授による予算の配分など。そして第1回投票でそれほど強い権力をもちえなかった葛西陣営が敗れ、決選投票ではこの候補に投じられた票の行方によって勝敗が左右されることになった。それぞれ利権や現金の提供を申し出て、結局野坂教授に強力なプッシュをした財前が教授になった。

* <記載なし>

(事例19：医学部保健学科1年男子)

4. 教授選は教授の1人1票で多数票を取ればなれるが、その票獲得のためには学問的業績だけでなく、学閥や学派も考慮されるうえ、教授も人間であるためにワイロ、学会の役職などでつり、多数派工作をしている場合もあるようだ。また、その選任には膨大な労力、時間、金がかかるため、医局で候補者を支援している者も、候補者と一種運命共同体のような感じであるので、支援する人は自分の将来をその候補者に託すといった面も見られる。そのような莫大なコストをかけてまでも、教授の地位を欲するのは、助教授以下の医者と教授との権力、地位の差が大きく開いているという現実があることも見逃せない。

* 学歴 = 悪という図式が一部の新聞にはびこっているような感じをうけるが、その意味するところを勉強でき大変有意義でした。悪筆でごめんなさい。

(事例20：医学部保健学科1年女子)

4. まず学閥が存在する。どの学閥に所属し、どこまで密接になれるかが重要である。白い巨塔の主人公は、まさに、その教授選のために学閥組織に左右されていた。まずは、結婚である。奥さんとなる人の父親の力から判断したとみられる。また、病院内では自分の地位確保のため教授に接近して頭を低くしておく。教授たちは学部長を軸に、自分たちの地位安定を図るのに一番よいものを次期教授とする。そこには、教授たちの対立などもある。つまり、実力社会というよりは、お金とコネの社会である。

* 学歴社会には日頃から疑問を感じていましたが、どういうところに問題が生じるかなど、項目にしたりして学んだところはすごく興味深かったです。白い巨塔のビデオを見て、時代の変化はすごいなと思いました。

(事例21：医学部保健学科1年女子)

4. 教授選を行うために、教授側、臨床などがそれぞれ候補の助教授を推薦し、その中から選抜する。この『白い巨塔』では浪速大学出身の助教授と他大学の助教授が有力候補であった。教授選を行うのは、現教授、外科、内科、基礎、臨床の医師であり、過半数をとらなければならない。自己の得になるような助教授を候補にあげる医者の中で、そういう政治的な面は考えずに、本当に自分が教授にふさわしいと思う人を選ぼうとする人もいた。この大学病院の大学出身者であるか、他大学出身者であるのかという点も関わってくる。この教授選では、裏でいかに自分の票を集めるかも大いに関わる。

* <記載なし>

(事例22：医学部保健学科1年女子)

4. 医学部内の教授、基礎16人、臨床15人の投票により決定する。候補者を選ぶのに吟味する内容は、結果から見ると、個人の業績より、出身・学閥の方に重点が置かれていた。教授と助教授の格差はかなり大きい。第一外科の教授が自分の退官後、そのまま助教授が教授になっては、大学医学とのつながりが切れてしまうと考え、他の大学の業績ある教授の下で助教授をしているものを候補者にした。また、医局内では、以前第一外科助教授だったが他大学に転任した者を候補者にする動きがあった。選挙はこの3人からひとりを選ぶことになり、最終的には、第一外科助教授が教授になった。

* <記載なし>

小括

以上の感想から、内容を把握していない者、把握している者が混在し、その理解の程度にかなりばらつきがあることがわかる。また、こういうビデオを用いた授業への反応については、数回にまたがってビデオを使うことへの不満が一件あった(もっともな不満である)他は、概して評価は高いと言えよう。もちろん、試験と合わせて行われたアンケートであるから、リップ・サービスというか、厳しい批判が出てこないのは当然という見方もあろう。私自身、その可能性を否定するものではない。次回検討する平成9年度前期の場合には、授業最終回にアンケートをとっているのだから、その結果と合わせて判断していただきたい。はっきり言えることとしては、前期のアンケートの場合にも多く見られたことではあるが、いくら具体的で身近な例を挙げても、それが文字資料や口頭・板書で伝えられるのみでは、現代の学生には、十分に実感を伴って伝わらないようである。そこで、このようなビデオ教材を用いた授業が威力を発揮するわけである。

ただ、以上の後期の学生のアンケートから見るとおり、ビデオを使って行った授業はそれなりに評価が高いが、この教材を「使用した方がいい」とは言えても、「使用しなければならぬ」とまでは言えないと思われる。なぜなら、本授業において、ビデオ教材を使用する意味とは、授業内容を効果的にまとめ上げ、かつ具体的な例として記憶に定着させることを狙っているからである。少人数教育の場合であれば、これらのことを効果的になしえる代替手段が存在するであろう。例えば、グループ討論であるとか、フィールドワークであるとか、研究発表形式であるとか、他にも多くの代替手段があると思われる。

しかし、多人数授業の場合にはどうであるのか。教員はマイクを使って、(個別の学生の目を見てではなく)「群」を相手に講演スタイルで授業を展開する。準備の程度、教員の語り方、授業展開のテクニックの稚拙など様々な要素が学生の理解度にかかわってくるであろう。だが、一方通行的で、散漫になりがちなのは、教員個人の問題ではなく、多人数教育につきものの限界である。学生の専門外のテーマで論じることになる教養原論の場合、特にその傾向は顕著になる。この散漫になりがちな授業を引き締め、しかも授業をまとめ上げる要素として、視覚教材は実に有効であり、しかもこれに取って代わるほど効果的な方法は多くないと思われる。

一見、些末なことではあるが、授業中教室を暗くする関係上、内職がほとんどなくなり、寝ているものを除けば、ほとんどが画面に集中することになる(つまり、私語がない)。学生としては、講義ノートの場合とは違って、コピーをとるわけにはいかないのであり、こちらが黙っていても、真剣に視聴せざるを得ないわけだ。

もちろん、やみくもにビデオを見せればいいわけではなく、そこにはシラバスの練り上げ、教材の厳選など、しなければならない、多くの準備がある。ビデオ教材は、その使用法を一つ間違えば、無効果であるどころか、有害でさえある。また、教科の種類によっても効果の程度は大きく異なってくるであろう。こういった問題点に触れる紙幅は残っていないので、次回、平成9年度前期の学生の反応の分析と合わせて、その問題点について検討していきたい。(以下、次号)

The Effectiveness and Problems about Using Audio-Visual Materials(1):A Study on Kobe University(2)

YAMANOUCHI, Kenshi (Associate Professor, R.I.H.E., Kobe University)

The purpose of this paper is to examine the effectiveness and problems about using audio-visual materials in the lecture of "Kyoyo-Genron"(that is, the subject of liberal arts and sciences). In examining this, I use the record of my lecture as a experimental field.

I used the audio-visual materials to deepen students' understanding of my lectures. The name of the material was "Shiroi-Kyoto"(in Japanese, The Enormous White Tower"). This film was released in 1965, and the most impressive and shocking one of that year. this saterized the world of university hosipital. I thought this film is the best material to impress the conclusion of my lectures to students effectively , especially in the case of the lecture witha large number of students.

This paper is the the first half of my paper. In the second half, I will summarize my conclusion.